

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

●脂っこいヨーロッパ建築に辟易する

私の祖父は千葉県佐倉の堀田藩の出身、祖母は長州の
出で、祖父母は明治期に所帯を持ち神奈川県藤沢の駅前
に屋敷を構え診療所を始めた。

祖父が始めた藤沢駅前の病院は、叔母夫妻が引き継い
でいた。

1970年頃、藤沢市は藤沢駅北口の駅前再開発計画を
始めた。

鎌倉や藤沢の屋敷の広さは明治時代には1町歩＝
3000坪で、大正・昭和に入ると、1畝＝300坪になり、
産業構造と核家族化がすすんだ現代では30坪に縮小・
細分化されているという。

藤沢駅前には駅前広場やデパート、バスターミナルなど
になり、叔母夫妻が経営する病院は藤沢駅前から辻堂に
移転した。

移転に際し医療から福祉・介護施設に転換する計画が
検討され、従妹と私に北欧の福祉施設を視察するように
依頼された。

当時、国立公衆衛生院の松本恭治氏が団長となり北欧、
デンマーク、オーストリアの福祉施設や建築を見学する
ツアーがあり、従妹と私はこれに参加した。

これが、私にとって初めてのヨーロッパの都市と建築
を見学する機会となった。

オーストリアの首都首都ウィーンでは、14世紀に建
設されたゴシック様式の代表的建築シュテファン大聖堂
や、ハプスブルグ家が夏の宮殿として使用したバロック
様式建築、シェンブル宮殿やアールヌーヴォー、セセッ
ション建築等を見学した。

北欧では現代建築の巨匠、アルヴァ・アアルトの作品
なども見学する機会を得た。

これらの建物は建築史の教科書通りで、建築作品とし
て表現するまでに膨大なエネルギーが注がれ完成度を高
めていた。

1週間以上のヨーロッパ滞在を通してホテルやレスト
ランで食事していたが、旅の半ばから飽きてしまい、私
の食欲は衰え、お茶づけや和食が食べたく、日々の食事



唯一心動かされたスウェーデン・ストックホルムの建築。
エーリック・グンナール・アスプルンドの設計による。
一切の装飾が排除され建築の構造躯体のみが表現された建築。

にうんざりしてきた。

私の胃袋と同じように、私にとってヨーロッパの建築
は、脂っぽく、肌に合わなかった。

ヨーロッパ滞在中、現地の食事の脂っこさに辟易し和
食が懐かしかったように、現地の都市や建造物の表現に
辟易し、全く感動を覚えなくなった。

その後、私が訪れたインドやアジアの建築群に出会っ
た時の素直な感動はなかった。

建築作品の完成を目指すヨーロッパ建築のエネルギー
や情念の根底には、東洋の感性とは異なるキリスト教特
有の理念があるように思える。

これが脂っこく肌に合わない嫌悪感を感じさせていた
のではないと思われる。

明治維新後、日本の為政者が目指した近代化＝西欧化
と、私が感じた西欧建築や都市文化への違和感にはズ
レがあるように思える。

私にとってヨーロッパ文化や、その建築文化とは何で
あったのか？

この旅はキリスト教を基礎とした西欧文化と、東洋の
文化と建築造形の違いを意識し、私の東洋建築への親和
感はずいぶん低く、この旅で考えるようになった出発点と
なる旅となった。

ヨーロッパの旅で唯一馴染めた建築は、アスプルンド
の建築であった。一切の建築装飾表現をそぎ落とし、柱・
梁の構造材だけで建築表現としたシンプルな建物である。

みき・てつ

㈲共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。
URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。
建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった
時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を
開拓し続けてきたバイオニア。